



# 柿の木の家



川崎ゆきお

「柿の木が多いですなあ、この辺りの家は」

妖怪博士が少し郊外、もうそこは山裾の町を訪れた。この町の町内会で茶飲み会があり、そこに招待されたのだ。本来なら講演で呼ばれ、大名旅行のようになるはずなのだが、その規模ではない。何せ妖怪ジャンルのためだ。

茶飲み会は大きな屋敷でおこなれる。バスで降りた妖怪博士は、出迎えの青年と一緒に会場へ向かっている。てっきり老人の集まりかと思っていたが、そうではなく、ここはこの地方のちょっとした商工会議所のようなものなのだ。商売だけではなく、町のことも話し合われる。つまり、地元の有力者が集っているのだ。今は茶飲み話の会というような呑気な名になっているが、実際には古くからある講のようなものだろう。庚申構とも呼ばれている。

妖怪博士はそんなことは知らないし、また関係がないだろう。小さな仕事を拾い、こつこつと生計を立てているため、呼ばれれば何処にでも出かける。ただし赤字にならない限り。要はボランティアでは動かないだけのことだが。

その妖怪博士、柿の木ばかり見ている。もう既に実だけ残しているものもある。実に負けないほど葉も柿色のもある。同じ柿の木でも、なかなか葉が落ちないタイプもあるのだろう。そういう木が古そうな家の庭先に見えている。

「やはりいいねえ、柿の木は、この季節はこれですなあ。紅葉や楓より、私はこの食べられる柿、不規則に曲がって折れそうな枝、これが好きだよ」

「この辺りは多いですよ。でも柿の産地じゃありません」

「そうなのかい。しかし、見事な枝振りで、かなり古木だねえ」

「まあ、七十年以上のは珍しいかと」

「その前に枯れるか」

「そうですねえ。家の庭もそれぐらい続かないと」

「うむうむ」

「あっちの家の柿は、若そうだねえ」

「ああ、まだ苗木ですよ。新婚さんですよ。嫁をもらったんです」

「えっ、柿の嫁」

「本当のお嫁さんですよ。嫁入りのとき、柿の苗木を持ってくるんですよ」

「そうなの。そんな風習が」

「そうです。そしてそのお嫁さんが亡くなる時、その柿の木で焼くんです」

「ほう。じゃ、実家が柿の木を持たせて嫁に出す」

「そうです。二十歳で嫁に行き、九十まで生き、長寿を全うしたということになるでしょうねえ。柿の木も太く大きい。薪には十分な量かも」

「じゃ、ここらの屋敷には、それで伐った柿の木の株が残っておるのじゃな」

「もう柿の木で火葬にするなんてことはありませんから、伐らないで残していますよ」

「この地方の習わしかね」

「ここじゃなく、お嫁さんの実家の習わしです。この町ではそういうことはないのです、近在の町や村から来た人の習わしですよ」

「じゃ、ここではそんなことはしない」

「はい。ただ、実家の意向を受けて、しっかり、柿の木で燃やしていたこともあったとか」

「死んだ後の薪まで用意しての嫁入りか、なるほど」

「そろそろ会場です」

目の前に大きな屋敷の屋根が見える。おびただしい数の柿の木が屋根にかかるほど伸びている。柿色が夕日のように明るい。

「これは」

「嫁さんが居着かなかったんでしょ」

「恥ですなあ」

「亡くなったわけじゃないので、伐らずに残しているんでしょう」

「ほう」

「この屋敷の人は、代々嫁さんをよく代える家系なんですよ」

「それで、秋になると、柿で真っ赤か」

「猿のケツのようにね。あ、聞こえてしまう。さあ、入りましょう」

妖怪博士は、茶飲み会で柿の妖怪をでっち上げ、それを披露した。集まった人は大受けしたが、屋敷の主だけは渋柿だった。

了